

平成 27 年度 発達障害の可能性のある児童生徒等に対する早期・継続支援事業
 (発達障害早期支援研究事業)
 成果報告書 (概要版)

実施機関名 (京都市教育委員会)

1. テーマ

教職員が発達障害等についての理解を向上させることによって指導方法を改善し、生徒の達成感・自己肯定感を向上させて、生徒の社会参加を促す。

2. 問題意識・提案背景

同校に入学してくる生徒は、不登校経験や特別な支援が必要な生徒をはじめ、多様な学習動機や学習歴を有する生徒たちが増加してきている。複雑な家庭環境等も影響し、様々な理由で中学校での学習内容を十分に理解しておらず、学力面の不安から定時制高校を受検する傾向が強い。このため、発達障害の可能性のある生徒だけでなく、低学力で、未学習・誤学習・学習習慣もない生徒も多く、将来への展望を見出すことができない等の理由のため、約 3 分の 1 程度の生徒が卒業せずに退学していく。

また、自尊感情が低い傾向があり、そのことが学級の人間関係に悪影響を与え、より良い集団を形成することを妨げている。こうした中、様々なトラブルが生じるたびに教職員間で話し合いを持ち、発達障害等についての理解を深め、生徒の達成感、自己肯定感を向上させるわかりやすい授業を行うべきであるという問題意識が醸成されてきた。

高等学校での「指導」の歴史から、生きる力を育む「個に応じた支援」を実践するために何が必要なのか、どのように取り組んだらよいのか、「分かる」「できる」授業への取組と生徒理解を深めるための取組、指導方法を学びたいという機運の高まりの中、支援のあり方と方法、教職員の意識と授業改善を図るための実践・検証を行う。

3. 指定校について

(高等学校)

指定校名：京都市立伏見工業高等学校										
学級数及び児童生徒数										
課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		計
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	
全日制	〇〇科									
	××科									
定時制	工業技術科	36	2	24	1	23	1	8	1	
教職員数										
校長	教頭	教諭	養護教諭	講師	ALT	事務職員	相談支援員	アドバイザー	その他	計
1	1	13	1	5	1	0	2	1	3	28

4. 指定校における取組概要

①目的・目標

教職員が発達障害等についての理解を向上させることによって指導方法を改善し、生徒の達成感・自己肯定感を向上させて生徒の社会参加を促すこと。具体的目標として発達障害の理解、ICT 機器活用等の研修会実施（目標：研修会への参加率80%以上）、その有効活用と授業改善、個別の指導計画の作成と活用、情報の共有化を図る。生徒の困りに気づき、その対応を進めていくとともに、学習面や行動面で何らかの困難を示す生徒を含むすべての生徒が理解しやすいよう配慮、工夫した授業、指導方法の改善を図り、より分かる授業づくりを実践研究する。また、関係機関との連携強化を図り、入学後できるだけ早期から必要な支援が行えるシステムの構築、適切な実態把握、社会人として生きる力の育成、就労継続力に繋がる支援を実践、検証する。

②学習面や行動面で何らかの困難を示す児童生徒の明確化

発達障害支援アドバイザーへの相談できる体制をつくった。年度当初に実施する保護者・生徒と担任との面談時間を延長し、発達障害に関する質問項目を充実させた。そのことにより、各教科での困りに着目、実態把握と課題の情報共有に努めた。また、研修により、教職員のケース会議への参画意識が高まり、生徒への支援については、個別の指導計画を活用して取り組むとともに、出身中学校へ出向き、情報提供を受けて中高と繋がるよう実施した。9月からは特別支援教育支援員（京都市総合育成支援員）として、2名配置し、学習理解支援を行った。毎週1回、全教職員が参加して情報共有のための会議を開催した。情報を共有することで教員が同じ方向を向いて指導を行うことができています。組織として関わるのが有効であるということが実感出来つつある。

教職員向けの校内研修会を5回、生徒向けの研修会を1回開催し、生徒の困りを見逃さない目を養い、対応力を培うとともに、生徒が自身の社会性を自己分析し、自身を振り返りながら社会で生きる力を高める機会を設定した。

③学習面や行動面で何らかの困難を示す児童生徒に対する支援内容

・授業における指導方法の工夫

ユニバーサルデザインを意識した授業づくりの実践。ICT 機器（iPad）を購入し、研修を活かして各教科で視覚に訴える教材を作成、作成教材を発表し評価し合った。学習内容の理解を深めるために総合育成支援員を活用。対象生徒の隣にずっとつくのではなく、全体への学習支援をしながら対象生徒のサポートにあたった。

・放課後補充指導等の個別の指導における指導方法の工夫

個別の指導計画を活用し、担任と教科担当者との連携強化を図り、躰きの箇所とつきたい力のすり合わせを行い、課題を設定、生徒の就労体制や体力を配慮しながら学習課題の達成に向けた取組と補習の充実を図った。

④学習面や行動面で何らかの困難を示す児童生徒に対する支援内容の妥当性の

評価手法

学習態度と学習意欲の評価：未学習、誤学習、学習態度、学習習慣のついていな

い生徒、学ぶことに興味がない生徒が教室を出ていくことなく、自分の席に座り、授業を受けている姿が多く見られるようになった。「勉強がわかる」、「学校が楽しい」とアンケートに記入されている。

個別の指導計画を活用してのケース会議の実施、課題の取組と生徒の変容

出席日数・成績での評価：教科担当者会での各教科別の評価

日常生活態度：遅刻早退と就労とのバランス

5. 主な成果

(1)年間計画に沿って研修会を実施することで、常に特別支援教育について意識する環境が生まれ意識改革に繋がった。研修内容も各人の力量で理解度は異なるがそれぞれに合った受け止めができています。生徒対象の研修会も参加率 83%と高かった。

(2)課題のある生徒に対しては、個別の指導計画を活用し、学習習慣の低い生徒たちの幅のある学力の中では総合育成支援員の配置が有効であった。担任のみの力や関わりだけでは課題達成は難しく、組織として関わるのが有効であるということが実感として受け止められる教員が増した。

(3)毎週、情報を共有することで教員が同じ方向を向いて指導を行うことができています。具体的な支援方法や関わりについては継続して取り組む必要はあるが、生徒の努力が教員にみえるようになり、そのことが教員と生徒との関わりをよくすることで、生徒に自尊感情が育まれてきた。

(4)早期支援を実践するためには保護者や中学校からの情報が非常に有効であること、他機関との連携が不可欠であると認識し組織体制の中で連携強化を図った。保護者や中学校との連携は早期支援に繋がり、過去の姿を想起し、現在の本人の姿だけで判断するのではなく、将来を見据えての支援を考える必要性を意識しつつある。トラブルが生じた時、外に現れる言動だけで対応するのではなく、内面を理解しようと考えようになり、授業や学校生活全般での関わりが変化しはじめている。

(5)ICT 機器等を活用して生徒が分かる授業を展開することで授業態度が形成され、授業が楽しい、分かりやすいと実感している生徒が増した。

6. 今後の課題と対応

(1)研修会の実施、個別の指導計画の作成など、発達障害について意識をしていなかった教職員についても意識するようになったが、生徒に対する対応についてはまだまだ不十分であり、更なる理解と実践を進める必要がある。継続して全教職員で情報共有する場を大事にして、支援方法を学び、実践していく。

(2)ICT機器の活用については、全教科教材を作成することと明言したことで取組が進み、授業における有効な活用方法が話し合われるようになった。しかし、まだまだ教員主体の資料であったり、受け止め手である生徒の気持ちや視点の動きへの配慮は未熟である。「授業が変われば生徒も変わる」を合言葉に、指導者が生徒の特性や課題に合わせてICT機器等の使用方法を工夫することで、より「分かる授業」の実践を推進する。そして、各教員が主体的に授業改善を実践しようとする職場環境づくりも大きな課題の一つである。

(3)生徒の努力が活きる学校生活であるよう、学力保障、進路保障、成績評価をどの

ように考えるのかの共通理解が必要である。

(4)保護者と本人への面談や中学校訪問の充実を図ったが、これで情報をすべて把握することは難しい。PTA組織もなく、年間を通して保護者と接する機会は少ないが保護者参画の必要性を十分認識し常に保護者と連絡を密にする。

(5)地域連携については、出身中学校、医療機関、「育支援センター」(総合支援学校の教育相談センター)、就労先等との連携を一層充実させる必要がある。特に就労先での本人の言動や業務内容の理解は、対人関係でのトラブルや担当業務遂行具合など、離職に繋がる事はできるだけ少なくなるよう、本人との協働を図りながら本人の良さや努力をアピールしていきたい。

7. 問い合わせ先

組織名：京都市教育委員会

- | | |
|-------------|----------------------------|
| (1) 担当部署 | 総合育成支援課 |
| (2) 所在地 | 京都市下京区河原町松原上ル二丁目富永町 344 番地 |
| (3) 電話番号 | 075-352-2285 |
| (4) FAX 番号 | 075-352-2305 |
| (5) メールアドレス | y-ikusei@edu.city.kyoto.jp |